

## 講演 「改革への挑戦・地方から国を変える！」

三重県知事 北川 正恭 氏 (02-3)

7年前、「数の論理」に失望して国会議員から三重県知事に、99年には80%を超す得票率で再選を果たした北川知事ですが、その改革魂は凄い。人材薄きわが政界にとって今や希望の星と言えましょう。さらにすばらしいのは小泉さんと違って経済、経営が分かる政治家という点です。近い将来、必ずやわが国のリーダーになることは間違いない人物と思うのですが、如何ですか？

- \* 「世界が変わった！」を私が痛感したのは85年の「プラザ合意(円高合意)」だ。頭の大きさに帽子を合わせる時代は去り、帽子に頭をムリヤリ合わせなければならない時代がやって来たということ。つまり、日本の右肩上がりの成長時代は終わり、これからは世界の情勢に合わせて対応していかなければ、国は存続し得なくなったのだ。
- \* 即ち、キャッチアップで経済復興を果たした日独に対し、戦勝国米英のリベンジが始まったのが円高合意、為替レートが一気に100円まで上がった。今までの積み上げ算ではもはやダメ、「100円」を価値基準にしなければ勝てないということ。「日本は、今変わるべき時！」と思った私は、後援会の猛反対を押し切って知事選に出馬する。
- \* 40年続いた日本経済の「右肩上がり」、こんな時代の社会は管理しているだけでよかった。学校教育においても5科目を平均的に80点以上とって、有名大学 高級官吏、有名大企業をめざす子供が増えた。従って、突出した才能のある子供はスポイルされていく。戦後の輝ける成功例が、実は反対に悪い結果をもたらしてしまったと言える。
- \* このような時代認識のもとに県庁を管理型から経営型に変えようとしている。管理型とは、例えば公民館。日曜はダメ、平日は6時まで。ニーズの高い時間帯を閉めてしまう。「開ける！」、「知事、もし事故が起こったらどうします。その責任は？」一事が万事、供給者側の論理だ。サービスの受け手側に立った行政に変える必要を痛感する。
- \* 県民はすべてお客様、その満足度を如何に高めるか、これが経営型行政だ。あくまでも県民からの発想を重視することで、「生活者起点」を行政のキーコンセプトにした。タックス・イーター(税金を食べる)からタックス・ペイヤー(税金を払う)に重点を移す、つまり物を造り、売る側から、買う側の論理に行政をシフトしていったのだ。
- \* そうなると必然的に起こるのが情報公開。従来の行政は万事「知らしむべからず」で非公開。それを全部バラすというのだから、官庁にとっては辛い。が、いったんバラしてしまえばこんなラクなことはない。みんなを同調させる、それは県民を“共同正犯”に仕立て上げることだから。「情報公開」が三重県のキーワードになった所以だ。
- \* 組織も経営型に変えた。縦割りからフラットなネットワーク化へだ。そのため課長制をやめマネージャー制に。課があると人員、予算を増幅させる作用を生む(ハーキソンの法則)。「あれもこれも」ではなく「あれかこれか」の時代には、縦割り組織は無意味。また徹底した権限委譲をやった。迅速かつ内発的な自己決定体制が肝要だからだ。
- \* 前例踏襲型から顧客ニーズ反映型に行政を変えたが、その戦略はこうだ。私のビジョンを示す 各層からそれぞれミッション(公約)を出させる。その業績を評価する。それを人事考課に結びつける。「あの人は人柄が良いから」「あいつは可愛いイヤツだから」は一切排除。分権自立、公開参画、簡素効率を徹底実行することに尽きる。
- \* 具体的には「役所的常識」の打破だ。例えば名刺。私費だという。仕事をすればするほど損をする。民間では考えられないことだ。県で調達するという私に国から文句を言ってきた。「裁判しようか！」の一喝で終わったが、一昨年の方分権法案が通るまで、80%が昔の官選知事時代のままだった。その「常識」が変わってきたのだ。
- \* 道や橋を造って県民から喜ばれる時代は過ぎた。37年間、不毛の論争を続けていた「原発」を中止した。21世紀のパラダイムにふさわしい新しい価値を創造しなければならぬ。明治維新は薩長という辺境から狼煙が上がった。国を変え得るのは地方からではないか。その責任は我々の世代にある。新しい価値観のもとに結束しよう！

株価が好調です。「12年ぶりの大底を打った」「9.11テロ直後の9月末が9,600円だったから、3月末がもし13,000円まで上がると、流れは完全に変わる」「待ち焦がれていた外人がいよいよ買いに入る」以上が強気の山本清治さんの見方。3月危機は、まず遠のいた！(3.5・石井拜)